

喜神サービス通信

LOVE

話くわっちー

2015
2月号

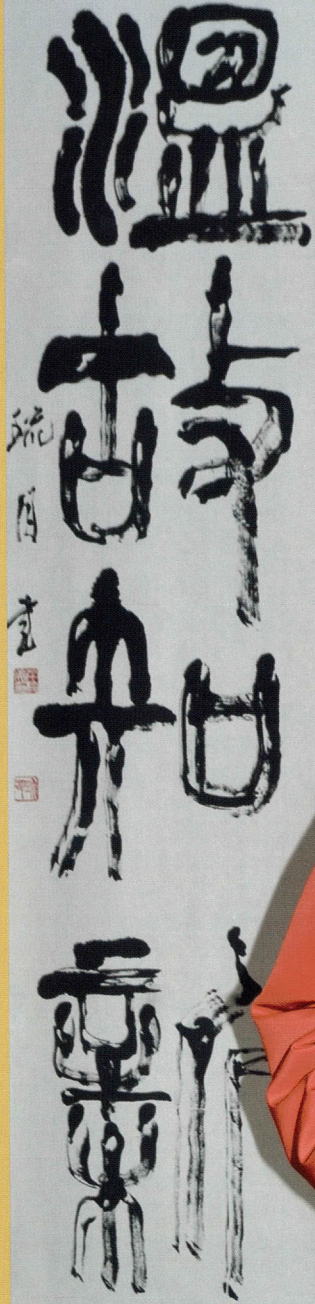
毎月1日発行

107号

無料

15,000部発行

★使ってお得なゆいま～るクーポン付き



◎今日の人

アダン筆制作者

吉田元さん

裏面のアンケートはがきに
記入して送って頂くと、毎月
素敵なプレゼントが当たります!



- ちよつと暮らしのお手伝い!
- 暮らしの中の法律
- お庭拝見 etc.....

※読者参加型の情報通信「話くわっちー」を目指します。

今月の人

●アダン筆制作者

吉田 二元さん

王朝時代の工芸再現

今年第2尚氏・尚円王生誕600年。この記念すべき年に沖縄県民は、戦前、戦後に散逸した文化財の返還、または一時返還展示会の開催を目指し、県民自らの目で琉球王朝時代の文化に接し得ないものかと夢を描く。沖縄のアイデンティティと文化を継承する気持ちの重要な時期と捉え、夫婦で夢を求めて色々な事をやろうと決意を新たにす。

アダン筆作りに手を染めてから23年になる。地方公務員の頃、体調をくずし療養生活中に好きだった絵や書に親しんだ。竹筆と出会い沖縄の植物でも筆が作れないかと試作をくり返すうち、海岸にあるアダンの根に「コレだ」と閃いた。

当初は知らなかったが、独自の工法を試行錯誤するうち文献で、アダン筆は琉球王朝の役人が用いていた事や、江戸時代の「雨月物語」の作者・上田秋成が愛用していたことを知り、製作に自信を深めた。

ながい間途絶えていた工芸品をほからずも再現したことになるが、その品質、美しさ、使い勝手に多くの特徴を知った。手にはいりやすい材料で

ある。制作時には水分が多く繊維質で非常に丈夫。穂先と持ち手の軸が一本で、毛筆のように穂先が抜けたりしない。水分の吸収がよく墨もちがよい。穂先の「命毛」の部分が摩擦してもサンドペーパーで再生でき長く使用できる。書き味は毛筆と違い、墨のかすれや、豪快な線が出たり、時にやさしく書が楽しくなる。



王御冠の技術を研究

ワラの筆、竹の筆などは全国にあるが、実で作れる筆はアダンだけ。パインナップルのような大きな実を形づく小さな個体から生まれる。工房に

は小指より細い筆から人物丈までさまざまな筆が並ぶ。最近、特大乾燥機を使って水分を抜き、持ち手部分の表皮が堅くしまる技法を開発した。数年前から「王冠筆」の制作を機に琉球王朝時代の「王御冠」を工芸品として制作している。王朝時代の工芸技術を研究し受け継ぎ広めようと努力の日々である。王冠は写真の通り12列の金糸と各列に配された色とりどりの玉24個、かんざし。12と24の数字はそれぞれ干支と1日の時間の意味があり、おめでたい数字だという。

王冠は大、中、小の3種類あり、かんざしのアレンジ商品としてループタイ、ペンダント、イヤリング、ネクタイピンなどがある。それぞれに施された絵図に注目がいく。果たして龍の爪は4本か5本か。5本の爪は中国の王のみが許された。



仲間を集め地域を活性

2014年5月18日から6月7日まで、第46回欧米国際公募ポルトガル美術賞展の入選作品がセトゥーバル市で展示された。吉田さんの「琉球王冠筆」も選ばれた。「アダン筆が琉球王朝時代にあったことがアピールできた。フランス展も3回開いてきたが、61歳の今年はウチナーンチュ系知事が誕生したハワイ州で開きたい」と意欲を燃やす。

アダンの紙、くつ、アトピーに効くセッケンなどオリジナルの製品を手がけている。ひとりでも多くの仲間が増え、ハンドメイドで地域を盛り上げたいと願っている。豊かな自然は活用を待っている。来たれ若人たち。

